九州産業大学国際文化学部紀要　第 38 号　33－42（2007）

大学生の社会的スキルと仲間からの認知度の関連

久木山　健　一

問題と目的

多くの大学生が，大学在学中に対人関係上で大きな変化を経験する。大学入学による新しい友人関係の形成，部活動，サークル活動やゼミナールへの参加による異年齢での交流，アルバイトや地域活動による社会人との交流などを通じ，これまでにない新しい対人関係を経験していく。このような状況において，適切な対人関係の形成と深い関連を持つものとして，社会的スキルがしばしば注目されてきた。

現在，青年期，成人を対象とした社会的スキル研究は，大きく分けると以下の２つを挙げることが可能である（堀毛，1990）。１つは，社会的スキルをある程度安定した能力として，すでに有している社会的スキルと，さまざまな対人適応状態との関連を検討する社会心理学的研究である。もう１つは，社会的スキルの行動面に着目し，ターゲットとなる社会的スキルの学習を目指す行動心理学的な研究である。

社会的スキルの測定方法からみると，社会心理学的研究においては，自己評定法による質問紙をもちい，比較的大人数に調査を行い社会的適応との関連をみた研究が多い（例えば，孤独感：相川・佐藤・佐藤・高山，1993・対人ストレス：橋本，2000・恋愛：堀毛，1994・学校適応：戸ケ崎・坂野，1997）。

また，行動心理学的研究においては，社会的スキル・トレーニングなどによる，専門家や教員によるトレーニングを通じ，自己評定，専門家による評定やアセスメント，観察を通じた詳細な社会的スキルの測定を行い，その変化を検討する研究が多い（例えば，後藤・佐藤・高山，2001；石川・小林，1998など）。

上記の２つの研究の知見は，あまり融合が進んでいるとは言えず，社会心理学的研究では，個人の社会的スキルの獲得などの現象の理解が困難であり，行動心理学的研究では，個別のケースを全体的な社会的スキルと適応の関係性の中に布置することが困難であるといえよう。これらは，大人数を対象に測定を行い，集団の中での位置づけを理解するのと同時に，個別の深い理解が可能な測定方法の確立がなされていないことに原因があると考えられる。

相川（2000）では，社会的スキルの測定法を，１．専門家が測定する場合，２．情報提供者

から情報を得る場合，３．本人から情報を得る場合の３つに大別している。

１の専門家が測定する場合の手法としては，面接法，行動観察法，ロールプレイ法を挙げている。いずれも，アセスメントレベルの詳細かつ深い理解が可能であり，妥当性も高いものであるが，測定にかかる時間や人的資源，専門的訓練などの面でのコストが高くなることが問題として考えられる。

２の情報提供者から情報を得る場合の手法としては，測定対象と同一カテゴリに存在する仲間による報告，測定対象と同一カテゴリには属さないが，何らかの関係を有する関係者からの報告を挙げている。仲間による報告に関しては，社会的スキルの行動レベルでの特徴が記述されている複数の項目をもちいて，仲間が測定対象をポイント尺度上で評定する評定尺度法，ゲス・フー・テスト，子どもを対象としたソシオメトリック・テストなどが挙げられている。関係者による評定としては，評定尺度法，ランキング法などが挙げられており，主に教師が児童生徒を評定するものが多く紹介されている。これらの手法は，測定対象に対して，仲間や複数の教師といった，複数の評定が得られることによる信頼性の向上が考えられる。

３の本人から情報を得る場合の手法としては，自己評定法，自己監視法に大別される。自己評定法としては，本邦で最も多く使用されていると考えられる菊池（1988）による KiSS-18などが含まれている。実施の簡便さ，統計的処理との親和性，測定コストが低いなどの長所より，本邦で最も使用頻度が高いものとなっている。しかし，社会的望ましさの影響や，主観的判断による認知の歪みの影響を受けやすいことなどより，妥当性に関する問題が繰り返し指摘されている。

上記の既存の測定法をまとめ，相川（2000）では，「もっと測定を」と題し，テスト・バッテリを組む重要性を指摘しつつ，本邦において社会的スキル測定に使用される道具が絶対的に不足していることを指摘している。

本邦では，児童・生徒を対象とした社会的スキル研究においては，学級集団を基準とした社会的スキル研究が主体と言えよう。ソシオメトリック・テストで測定された学級適応と社会的スキルの関連を検討する研究や(前田，1995など)，学級単位で行われる社会的スキル・トレーニング法の開発などが主体であると考えられる（例えば，小林・相川，1999；吉田ら，2000など)。

しかし，大学生などの青年期になるにつれ，適応の対象となる集団は限定することが困難になると指摘されている(Crick & Dodge，1994など)。また大学生においては，小学生・中学生・高校生の段階と比較して，クラスという集団への帰属が少ないため，上述の情報提供者からの情報を得る場合の，仲間による報告という方法は，これまでほとんど使用されることがなかっ

た。確かに，規模の大きな大学では，学生は学部単位でまとめられることが多く，クラスという概念を持つことは少ないと考えられる。

しかし，小・中規模大学や，学部学科の定員の少ない大学，同一学部内に質的に異なる学科が存在し，学科単位でのまとまりが主となる大学などでは，クラス単位を積極的に採用しているところも少なくない。さらに，近年の少人数教育の導入などにより，クラス制を敷く大学が増加していることが考えられる。加えて近年では，サークル活動への参加の減少，講義への出席重視による授業への参加頻度の上昇なども指摘されており，講義が行われる単位としてのクラス・学科などの単位での適応というものが，大学生の社会的適応において果たす役割が増加している可能性が存在する。

そこで本研究では，大学生を対象に，本邦においても比較的多く開発され，また使用されている自己評定法ではなく，情報提供者から情報を得る場合の測定手法の開発を目指し，その第一歩として探索的に検討することを第一の目的とする。具体的には，社会的スキルの測定対象が所属する集団（クラス・学科）において，集団の成員からどの程度知られているかという認知度について検討する。

類似の測定手法として，まずゲス・フー・テストが考えられる。Hartshorne と May らの一連の研究（Hartshorne & May, 1928；Hartshorne, May, & Mailer, 1929；Hartshorne, May, & Shuttleworth, 1930など）を起源とするゲス・フー・テストでは，自主性や協調性などの特性について，集団の成員の誰が該当するかを記入させ，集団内での個人の役割や地位などの理解が可能である（永田，1970など）。

大学生の対人関係に関する近年の特徴をふまえると，大学内のクラスや学科では，比較的浅くお互いを傷つけない関係が維持されていて，クラス委員やリーダーは，役割として強制的に上から与えられるものとして，自然発生的に出来上がるものではないと考えられる。そのため，例えば「クラスでの代表として誰からも信頼されているのは誰ですか？」という質問をした場合，代議員やクラス委員などの名称が挙げられるのみで，社会的スキルの結果としてのリーダーシップなどに基づかない人物が挙げられる可能性がある。

次に挙げられる類似の測定手法として，モレノの一連の研究を起源とするソシオメトリック・テストがある（田中，1964）。「一緒に遊びたい人は誰ですか？」，「一緒に遊びたくない人は誰ですか？」などの教示をもちいて，選択および排斥関係を測定し，集団内構造や地位を測定する目的でよく使用されている。しかし，大学生を対象とした場合は，一緒に遊ぶなどの深い関係にある仲間の形成が少ない，もしくは調査単位のクラスや学科に存在しないなどの問題が考えられる。そのため，対人関係の範囲を決定することが困難であるなどの理由により，使

用は困難であると考えられる。

上記の比較より，大学生の比較的浅く広い対人関係上での適応を，他者評価によって評価する１つの手法として，友人ほどの関係の深さを要せず，また特別な役割なども必要としない仲間からの報告として，認知度というべき「相手のことを知っている」というレベルでの測定が有効であると考えられる。そのため，本研究では，認知度と社会的スキルの関連を検討することで，認知度の妥当性検証を行う。

この際，認知度と対になる測定として，既知度が存在する。認知度を測定するためには，集団からどの程度の認知を受けているかについて仲間からの報告を求めることとなる。その際，集団内の多くの成員と対人交渉を行った結果，集団成員についてよく知っており，他の成員に関する認知量が多い者の存在が考えられる。それに対して，集団内でほとんど対人交渉を行わないため，集団の成員のことをほとんど知らず，そのため他の成員に関する認知量が少ない者の存在が考えられる。集団内の成員間の対人交渉を行うことにより，他の成員に知られると同時に，他の成員についての知識も深まると考えられ，両者には相関関係があると考えられる。以上のことより，所属する集団の成員について知っている量を既知度として，認知度および社会的スキルとの関連を検討する。

次に，社会的スキル以外に，既知度および認知度に影響を与える要因として何が考えられるであろうか？日常的に起きる自発的な対人相互作用には，社会的スキルと認知度の関連が大きいと考えられるが，自発的ではなく，他者から与えられる対人相互作用によっても，認知度および既知度の上昇が可能であると考えられる。例えば，講義や演習の中での学生同士の共同学習や，グループによる作業などは，互いの認知度の上昇に有効に働くといえよう。しかしそれらの相互作用は，日常的に偶発的に行われることが多く，要因の統制が困難である。そこで本研究では，学校単位で仲間集団全員に行われ，かつ集団内での既知度や認知度に大きな影響を与えるイベントとして，大学での研修旅行を取り上げたい。学生同士の交流の広がりや深まりなどを目的として，研修旅行を実施している大学が多く存在する。研修旅行では，これまで話したことのない人との関係の広がりや，授業などを通じた理解よりも多様な側面からの対人理解の深まりが期待でき，それらを研修旅行の目的とする大学も多い（難波ら，2006）。そのため，実際に研修旅行によって，認知度および既知度が変化することが確認できた場合，研修旅行の意義が実現しているかについての知見を得ることが可能であり，同時に，本研究で作成された認知度および既知度の測定手法の妥当性の確認も可能になると考えられる。

以上より，本研究では大学での研修旅行を取り上げ，クラス内での認知度，既知度，社会的スキルの関連について探索的に検討することを目的とする。

方法

調査協力者：大学１年生183名（男性36名，女147名）。

質問紙：(a)社会的スキル尺度：菊池（1988）によるKiSS-18の18項目をもちい，「１．いつもそうでない」から「５．いつもそうだ」までの５件法で回答を求めた。(b)クラス内での既知度・認知度：各専攻のクラス全員の氏名を挙げ，「あなたは，同じクラスの以下の人たちのことをどの程度知っていますか」という教示のもと，「１．まったく知らない」から「５．よく知っている」までの５件法で回答を求めた。

調査時期および調査実施方法：2006年４月，６月に調査を実施した。心理学関連講義の時間をもちい，任意での参加を求めた。研修旅行前は，2006年６月の研修旅行の１週前，研修旅行後は，研修旅行の１週間後に採集した。

調査対象の群分け：研修旅行の有無が，認知度，既知度，社会的スキルなどの変化に影響を与えるかを検討するため，調査群，対照群1,対照群２を設定した。調査群は，４月，研修旅行前，研修旅行後に調査を行い，研修旅行の効果の検討が可能である。対照群１は，４月，研修旅行前，研修旅行後に調査を行うが，研修旅行を行わない群である。対照群２は，４月および研修旅行後のみに調査を行う群である。しかし，諸事情より対照群１において研修旅行前の調査を実施することができなかった。そのため，研修旅行の効果については，調査群の結果からの推測にとどめ，明確な検討は今後の課題となった（Table１）。

Table１　調査群，対照群１，対照群２で実施された調査の概要

	４月	研修旅行前	研修旅行後	研修旅行の有無
調査群	○	○	○	○
対照群１	○	×	○	×
対照群２	○	×	○	×

○…調査を実施，×…調査を実施せず

結果と考察

１．尺度の構成

(a)社会的スキル尺度：入学時の回答をもとに，原典に基づき算出したα係数は.86であり，信頼性が確認された。(b)クラス内での既知度および認知度：各調査時期における，クラスの成員から受けた認知度の平均を認知度得点とした。また，クラスの成員全員に対して行った認知度の評価の，個人単位での平均を既知度とした。

2．調査時期による既知度，認知度の変化の検討

調査時期による既知度および認知度の得点の相違を検討するために，1要因分散分析を行った。その結果，既知度および認知度のいずれにおいても有意差がみられた（既知度：$F_{(2,32)}=12.84$（$p<.01$），認知度：$F_{(2,82)}=144.45$（$p<.01$））。既知度，認知度いずれにおいても，調査時期による相違があることが確認された。そのため，Bonferroni 法による多重比較を行った結果，5％水準で各水準間に有意差があることがみいだされた（Table 2，Figure 1）。

Table 2　4月，研修旅行前，研修旅行後の既知度および認知度の平均点

	4月		研修旅行前		研修旅行後		F値	多重比較
	Mean	*SD*	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*		
既知度(調査群)	2.25	0.74	2.85	0.72	3.07	0.77	12.84**	4月＜研修旅行前＜研修旅行後
既知度(対照群1)	1.70	0.37			3.21	0.63		
既知度(対照群2)	2.48	0.55			3.41	0.61		
認知度(調査群)	2.37	0.42	2.94	0.42	3.13	0.40	144.45**	4月＜研修旅行前＜研修旅行後
認知度(対照群1)	1.69	0.21			3.23	0.31		
認知度(対照群2)	2.48	0.38			3.42	0.43		

＊＊…$p<.01$

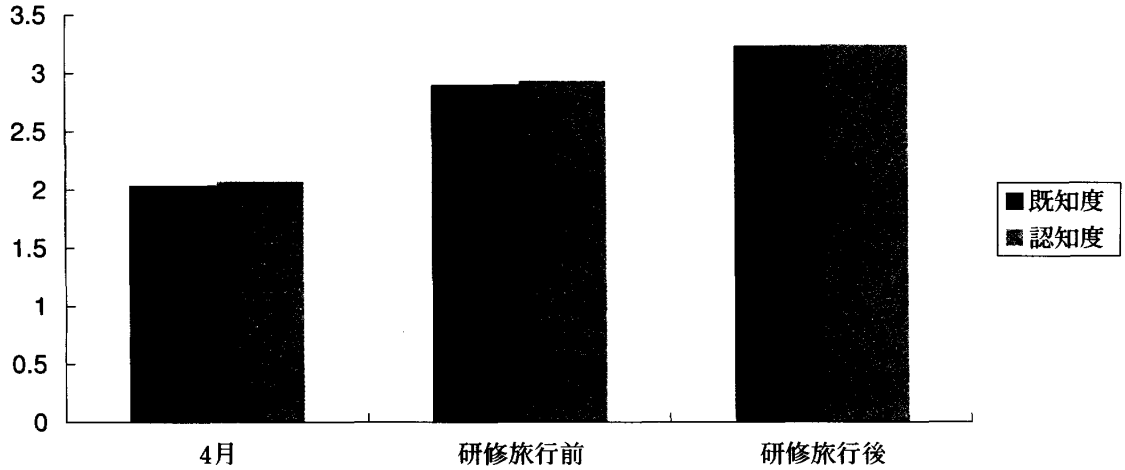

Figure 1　4月，研修旅行前，研修旅行後の既知度および認知度の平均点の変化

調査対象が大学の新入学生であり，かつ4月からの調査であることを考えると，調査期間中の講義や課外活動などを通じて認知度が上昇することは明確であると考えられる。そのことより，本研究で使用した認知度の測定法が，実際の認知度の変化を反映しうることが確認されたといえよう。

また，研修旅行前および研修旅行後の期間でも，既知度および認知度の得点は有意な上昇をしめしていた。難波ら（2006）の研究では，研修旅行を通じて多くの者が，挨拶程度はするよ

うになったなどの浅い変化や，相手のことをより深く知り，親睦が深まるなどの深い変化を研修旅行を機に体験することをみいだしている。これより，研修旅行をはさんで2週間という短期間の間で起こる認知度の上昇についても，本研究での測定法は反映することが可能であるといえよう。またこれより，研修旅行には対人理解の広がりおよび深まりを促進する効果があると考えられる。

3．調査時期による社会的スキルの変化の検討

まず，4月時と研修旅行後の社会的スキル得点の変化についてみていく。社会的スキル得点に関しては，4月調査時と，研修旅行後調査時の，全データをもちいた比較では有意な差がみられた(4月時：平均2.81,標準偏差0.51；研修旅行後：平均2.93,標準偏差0.48。$t_{(122)}=-4.05$, $p<.01$)。次に，実験群のみのデータをもちい，4月，研修旅行前，研修旅行後での社会的スキル得点の変化を，1要因分散分析をもちいて検討した。その結果，$F_{(2,36)}=3.18$ ($p<.10$)で，有意傾向にとどまった。各調査時期での平均値，標準偏差は，4月（平均：2.80，標準偏差：0.45),研修旅行前(平均：2.94，標準偏差0.42),研修旅行後(平均：2.99，標準偏差0.54)であった。

大学生の時期は，これまでとは違う新たな対人関係の中で，自分の社会的スキルを見直し，新たな社会的スキルを獲得していく時期であると考えられる（久木山，2005)。また，4月時にこれまでとは違うクラスの仲間などを相手に，自分のこれまでの人づきあいができないため，一時的に低下したと自覚していた社会的スキルが，本来の水準へ戻ったとも考えられる。

研修旅行の要因を入れた，時期による社会的スキルの変化の検討では，上昇傾向をしめしつつも，差は有意なものとはならなかった。研修旅行による，非日常的な対人関係の中で，新たな社会的スキルが身につくことも考えられるが，1泊2日の研修旅行という短期間においては，有意差が出るほどの上昇はみられないと考えられる。そのため，海外の研修旅行など，長期間の研修旅行の前後で社会的スキルの比較を行うことなどが今後の課題として考えられる。

4．認知度，既知度と社会的スキルの関連の検討

認知度と社会的スキルの関係を検討するために，以下の変数間の相関係数を算出した。まず，4月時，研修旅行前，研修旅行後の各認知度，既知度，社会的スキルの相関係数を求めた。また，先の分析で，4月時と研修旅行後の認知度・既知度・社会的スキルの得点に有意な上昇がみられたことより，認知度・既知度の上昇と社会的スキルの上昇の間に関連があることが考えられた。そのため，研修旅行後時の認知度，既知度，社会的スキルの得点より，4月時の認知

度，既知度，社会的スキル得点を引いたものを，認知度，既知度，社会的スキルの差得点として，各差得点間の相関係数も算出した（Table 3）。

Table 3　認知度，既知度，社会的スキルおよびその差得点間の相関係数

	既知度（4月）	認知度（4月）	既知度（研修旅行後）	認知度（研修旅行後）	社会的スキル（4月）	社会的スキル（研修旅行後）	既知度差	認知度差
認知度（4月）	.66**							
既知度（研修旅行後）	.44**	.12						
認知度（研修旅行後）	.43**	.47**	.33**					
社会的スキル（4月）	.09	.17*	.07	.13				
社会的スキル（研修旅行後）	.06	.16	.13	.20*	.79**			
既知度差	−.45**	−.46**	.60**	−.04	.00	.07		
認知度差	−.39**	−.67**	.16	.33**	−.08	−.01	.49**	
社会的スキル差	−.03	.04	.08	.07	−.41**	.25**	.10	.01

*…$p<.05$，**…$p<.01$

既知度と認知度の関連については，4月時の既知度・認知度，研修旅行後の認知度，既知度間には有意な正の相関がみられている。このことより，他人について知っている度合いが高い者が，他者から知られている度合いが高いことがしめされた。他者と多くの接触をし，相手を知ろうとする行為が，相手からも知られることにつながることがここから読み取れる。また，4月時の既知度と，研修旅行後の認知度にも有意な相関がみられている。ただし，4月時の認知度と研修旅行後の既知度との間には，相関がみられておらず，既知度と認知度の間の相関係数も，4月時に比べ研修旅行後のほうが小さいことがしめされている。このことより，4月の入学時などの関係初期においては，仲間のことを多く知っていることが直接的に他者から知られるのに有意に働くのに対し，ある程度関係性が落ち着いた段階では，単に仲間のことを知るだけではなく，学業，部活動，クラス活動などにおいて目立つことがあるなどの，他の要因からの影響を認知度が受けることを示唆しているとも考えられる。ただし，この点については相関関係からの類推に過ぎず，今後詳細に検討する必要があると考えられる。

既知度に関しては，4月時の社会的スキル，研修旅行後の社会的スキルのいずれとも有意な相関がみられなかった。他者に知られるためには，何かしら他者との相互作用が必要となるが，仲間について知ることは，直接的な相互作用なしでも，他の仲間に評判を聞いたり，対人交渉

を観察することでも可能となる。そのため，社会的スキルとの直接的な関係が存在しないと考えられる。既知度に関しては，対人志向性や親和要求などとの関連を検討していくことが課題となると考えられる。

認知度に関しては，4月時の認知度は4月時の社会的スキルと有意な正の相関が存在し，研修旅行後の認知度は研修旅行後の社会的スキルと有意な正の相関をしめしていた。そのため，社会的スキルの自己評定と同時に検討すべき，情報提供者による報告による手法として，認知度を使用しうる可能性がしめされたといえる。しかし，その関係は非常に乏しいものであることより，認知度については社会的スキル以外の要因を大きく受ける指標であることが考えられる。確かに，社会的スキルが高くない者でも，学業成績や部活動の成績が非常に高い者や，社会的スキルが伴わなくとも目立つ行動や言動を行うことが，認知度の向上につながると考えられる。以上のことより，認知度は社会的スキルの自己報告による測定の代用としての使用ではなく，同時に測定し，他の要因との組み合わせにより使用することが望ましいものであると考えられる。

差得点に関しては，差得点を算出する際に使用される変数以外に有意な相関はみられなかった。先にも考察したが，認知度の変化に供する変数が社会的スキル以外にも多く存在することが原因であると考えられる。また，調査期間が短いため，既知度・認知度・社会的スキルの得点変化自体が非常に小さいものであることも理由として挙げられる。今後，社会的スキル以外の要因を導入した認知度との関連の検討や，より長期間での認知度と社会的スキルの関連の検討が求められる。

引用文献

相川　充　2000　人づきあいの技術：社会的スキルの心理学．安藤清志・松井　豊（シリーズ編）セレクション社会心理学20．サイエンス社．

相川　充・佐藤正二・佐藤容子・高山　巌　1993　孤独感の高い大学生の対人行動に関する研究：孤独感と社会的スキルとの関係．社会心理学研究，**8**，44-55.

Crick, N.R., & Dodge, K.A. 1994 A review and reformation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115. 74-101.

後藤吉道・佐藤正二・高山　巌　2001　児童に対する集団社会的スキル訓練の効果．カウンセリング研究，**34**，127-135.

Hartshorne, H., & May, M.A. 1928 Studies in the nature of character: Vol.1 *Studies in deceit*. New York: Macmillan.

Hartshorne, H., May, M.A., & Mailer, J.B. 1929 Studies in the nature of character: Vol.2. *Studies in self-control*. New York: Macmillan.

Hartshorne, H., May, M.A., & Shuttleworth, F.K. 1930 Studies in the nature of character: Vol.3. *Studies in the organization of character*. New York: Macmillan.

橋本　剛　2000　大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連．教育心理学研究，**48**，94-102.

堀毛一也　1990　社会的スキルの習慣．斎藤耕二・菊地章夫（編著）　社会化の心理学ハンドブック：人間形成と社会と文化．（Pp.79-100）　川島書店.

堀毛一也　1994　恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル．実験社会心理学研究，**34**，116-128.

石川芳子・小林正幸　1998　小学校における社会的スキル訓練の適用について：小集団による適用効果の検討．カウンセリング研究，**31**，300-309.

菊池章夫　1988　思いやりを科学する．川島書店.

小林正幸・相川　充　1999　ソーシャルスキル教育で子どもが変わる．図書文化.

久木山健一　2005　青年期の社会的スキル改善意欲に関する検討．発達心理学研究，**16**，59-71.

前田健一　1995　児童期の仲間関係と孤独感：攻撃性，引込み思案および社会的コンピタンスに関する仲間知覚と自己知覚．教育心理学研究，**43**，156-166.

永田良昭　1970　学校における人間関係の理解．桂広介他（編）　児童心理学講座　別巻　金子書房.

難波久美子　久木山健一　小平英志　布施光代　2006　旅と旅行に関する研究(4)　―旅・旅行での対人経験と旅・旅行後の対人関係の変化との関連―．東海心理学会発表論文集，**37**.

戸ヶ崎泰子・坂野雄二　1997　母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響：積極的拒否型の養育態度の観点から．教育心理学研究，**45**，173-182.

田中熊次郎　1964　ソシオメトリーの理論と方法．明治図書.

吉田俊和・小川一美・出口拓彦・斎藤和志・坂本　剛・廣岡秀一・石田靖彦・元吉忠寛　2000　「社会志向性」と「社会的コンピテンス」を教育する―中学１年生を対象とした授業実践―．名古屋大学大学院教育発達科学研究科（心理発達科学），**47**，301-315.